

〈ポルノグラフィイ〉批判と ポルノグラフィイを消費する経験との間で

守 如子

ポルノグラフィイはフェミニズムの視点から女性の身体を搾取するものとして、批判されてきた。しかし、これまでの反ポルノグラフィイ論は、女性もまたポルノグラフィイの消費者であるという側面を切り落としている。また、ポルノグラフィイのおかれた社会的コンテクストを見逃している。

一、出発点：個人的かつ多義的なポルノグラフィイの経験から

ポルノグラフィイ問題は、フェミニズムにとって重要な論点でありつつも、運動と理論に支えられたポルノグラフィイ批判という文脈と、女性の性幻想を捉えようとする試みが、乖離しがちであるという難点を抱えている。本稿では、ポルノグラフィイを消費する経験とポルノグラフィイ批判との関わりを通して、一九九〇年代を生きた人々にとってポルノグラフィイ問題とは何かを考察してみたい。

まず、ポルノグラフィイについての個人的経験から始めよう。

で、何かが違っているという気持ちにさせられた。これまで見ていたポルノグラフィイとは異なり、女性向けポルノグラフィイには私を嫌な気持ちにさせ、マスターベーションを中断させるものがなかったのである。過激なものに対する嫌悪ではなく、男性向けポルノグラフィイからのみ受けるこの嫌な気持ちとは何だろうか、というのが本稿の出発点の一つである。もちろん、マスターベーションとは、決して愉快なばかりの経験ではありえなかった。ずっとわたしはマスターベーションをしていることを恥ずかしいと思っていたし、女のわたしがこのようなことをしていることが他人に知れたら身の破滅だと思っていた。そのような気持ちを救ってくれたのが、中山千夏の『からだノート』（一九七七）だった。この本のなかでは、さまざまな女性たちがあつからんと自分のマスターベーションについて語っていた。マスターベーションをしているのは自分ばかりではないんだ、という何でもない知識が、どんなに自己解放に役立ったかということは言うまでもないだろう。リップからフェミニズムにつながる「女性の性欲の肯定」という主張の重要性は、何度確認してもしすぎることはないことだと思う。しかし、フェミニズムから受け取った知は、同時にマスターベーションに対する矛盾した気持ちに拍車をかけた。ポルノグラフィイが女性像を歪めており、女性にたいするレイプという深刻な問題と結びついていると

卑近な事例ではあるが、わたしの個人的な経験を出発点としたい。わたしは子どものころからずっとポルノグラフィイを覗き見ていた。ただの興味からばかりではなく、マスターベーションに使用するネタを探すために、自ら積極的にポルノグラフィックなものにアクセスしていた。多少は少年向けもあったが、そのほとんどは大人の男性を対象にしたものだった。どんなに過激な表現も見つづければ平気になることもあるだろう。現在覚えているかすかな記憶をたどってみても、最初にどのような驚きを感じたものにもしだいに慣れていったような気がする。ただ、大人になったころ、当時出版され始めた女性向けポルノグラフィイを見た時、これまで見ていたポルノグラフィイ——基本的には男性を対象にしたもの——に比べ

いう指摘は、わたしがこれまで男性向けポルノグラフィイに対して感じていた嫌な気持ちを明らかにしてくれた。わたしが男性向けポルノグラフィイに嫌な気持ちをもっていたのは、歪められた女性像に対する反発と、本当のレイプが隠されているのではないかという不安を感じさせられていたからではないか。その一方で、フェミニズムの知は、差別的イメージを使う自分への疑念を、マスターベーションに刻印した。例えば、テレビの深夜番組のセクシユアルなシーンでマスターベーションしているときなど、このような番組が女性タレントの登竜門になっているかのように見せかける社会的状況への憤りを感じつつ、マスターベーションしている自分に強い自己嫌悪を感じるようになった。本稿の出発点のもう一つは、このような事例にも見られるような、ポルノグラフィイ批判とマスターベーションする自己とをどのように関わらせ、ポルノグラフィイ問題を考察していくことができるのかという問いである。本稿は、女性のマスターベーションも含んだポルノグラフィイ経験の多様性から出発し、ポルノグラフィイ批判理論を再考しようとする試みである。

二、〈ポルノグラフィイ〉批判理論

性的支配をうみだす制度としての〈ポルノグラフィイ〉

ボルノグラフィへの嫌な気持ちと言語化し、批判的な視点を確立させてくれたフェミニズム理論をまずは確認してみよう。フェミニズム視点からボルノグラフィはどのように批判できるのだろうか。

これまで、フェミニズムの文脈においてボルノグラフィという言葉は、「性差別的な性表現」として定義されてきた。

どのような内容をもつ性表現が、性差別的であると確定されてきたかという点、次の三つの表現内容をもつものと位置付けられることができるだろう。

- ① 女性への暴力を描くもの。
- ② 犯す男性／犯される女性というパターンに内在する支配／従属関係を描くもの。

③ 女性を性器などに部分化された存在として描くもの。
これらの内容をもつ性表現がボルノグラフィと定義されてきた。このようなフェミニズムの文脈におけるボルノグラフィという言葉の使用法を、以下では「ボルノグラフィ」と特に表記しよう。

「ボルノグラフィ」は、これらの内容を一貫して示すと同時に、女性の喜びの演技や、最終的に女性が共犯的に受け入れるシナリオを伴うことが多い。この提示によって、「ボルノグラフィ」の撮影現場でモデルとなった女性が直接・間接の強制にあることが隠蔽されると同時に、「ボルノグラフィ」

を見る人がすべての女性はそのようなことをされるのが好きなのだと思わせられる。その結果、女性への暴力や女性の矮小化は社会的に容認され、個人の性的経験や現実の女性がこの定義の範囲内に位置付けられ、セクシュアリティの楽しみが社会的に定義される。「ボルノグラフィ」はこのような社会的現実を構成し、女性を人格ではなく、モノや商品のように扱っているのである。これらの帰結として、女性は男性からの支配や暴力を甘んじ、肉体的安全やアイデンティティ、そして社会的活動が常に脅かされている。このような問題化が、「ボルノグラフィ」批判理論の要である¹⁾。

ボルノグラフィ批判から「ボルノグラフィ文化」批判へ

上記のように「ボルノグラフィ」は内容（＝女性への暴力や、女性の服従および部分化を描く）によって定義されるため、「ボルノグラフィ」批判理論はさまざまなメディアの分析に拡張される可能性を含む。性差別的な性表現を「ボルノグラフィ」として定義するならば、一般的な意味でのボルノグラフィだけが批判の対象ではなくなってしまう。フェミニズムの使用法とは異なるこのような使用法を以下では狭義のボルノグラフィと呼ぼう。狭義のボルノグラフィとは、「人々がボルノグラフィと呼んでいるもの」のことと定義する。具体的には、「読者の性欲を起こすための商品」と見なされ

ているもの、例えばアダルトビデオやボルノ雑誌などをさす。

「ボルノグラフィ」批判理論は、狭義のボルノグラフィだけをその批判対象としているのではない。それは例えば、船橋邦子がポスターや芸術作品をとりあげ、「ボルノグラフィ」と名指して批判していることから明らかである（船橋 一九八八 二四七）。船橋の議論からわかるように、「ボルノグラフィ」批判とは、狭義のボルノグラフィと同じ構造の表現を批判するという「「ボルノグラフィ」文化」批判になるのである。「「ボルノグラフィ」文化」とは、メディア一般に女性の性的身体が氾濫していることを指し、狭義のボルノグラフィと同じ「見る男性主体／見られる女性身体」という視線の構造をもつ性的表現が、「性的欲望を喚起する」という文脈以外でも様々な形で生活世界の中に入り込んでいる社会的状況を示している。このような狭義のボルノグラフィを中心とした総体的な「「ボルノグラフィ」文化」に支えられることによって、女性の自己身体に関するイメージが形成され、極端なダイエットに追い込まれるといったように、女性が自己身体を男性に見られるものとして統御してしまうことが「「ボルノグラフィ」文化」の問題として批判されているのである²⁾。

「ボルノグラフィ」反対運動という言説戦略

このように狭義のボルノグラフィを核とする「「ボルノグラフィ」文化」を批判の対象とするものが「ボルノグラフィ」批判理論であるが、この理論化は「ボルノグラフィ」反対運動の中からうまれてきたものである。「ボルノグラフィ」批判理論もまた、「ボルノグラフィ」反対運動を思想的に補強している。

フェミニズム視点が導入される以前、ボルノグラフィに関する論争の土壌は、①「猥褻」だから取り締まるべきであるという立場と、②人生を豊かにするために積極的に「解放」しようとする立場と、③「表現の自由」により擁護されるべきであるという立場の対立に占められてきた。フェミニズム視点による「ボルノグラフィ」批判理論は、この対立軸が女性の置かれた立場を考慮していないことを問題化する。

まず、①ボルノグラフィを「猥褻」だから取り締まるべきとする考え方は、性を危険で、破壊的で、根本的に反社会的なものと見なし、秩序に反する行為を引き起こすからボルノグラフィを批判するのであって、女性差別を引き起こすかどうかについては視野には入らない。また、②ボルノグラフィを積極的に解放しようとする性解放論は、欲望の力を基本的に無害で、人生を豊かにし、解放するものと見なし、統制にたいしては急進的であるような信念体系をとる。しかし、①

「猥褻だからポルノグラフィを取り締まるべき」という立場も、②「猥褻な」ポルノグラフィを解放して人生を豊かにすべき」という立場も、性を「社会の外にあり、社会に対抗する力に満ちたエネルギー」とするだけでなく、「まさにそのために、道徳を体现する自然な力」とみなすというセクシュアリティの本質主義的見解をとってしまっているのである(Weeks「一九八六―一九九六 一八四」)。セクシュアリティは社会の外にあるのではなく、社会のさまざまな制度によって構築されてしまっていることは、フェミニズム視点による「ポルノグラフィ」批判理論も共有する視点である。

一方、③「表現の自由」論は、ポルノグラフィが良いか悪いかの判断はせずに、国家からの介入を認めず多様な性表現を認めようとする立場である。この立場は、セクシュアリティを根本的な人間の本性とは見なさず、さまざまな嗜好を受容することに基づいた多元主義を認めている。しかし、差別よりも芸術的な価値を過大視したり、また弱者の言論である女性たちからの「性的虐待反対の表現」(MacKinnon「一九九四―一九九五 二六」)を相対的に奪いかねないという問題をもつ。「表現の自由」論は、「セクシュアリティが社会的に産出されることと、セクシュアリティがさまざまな権力関係に複雑に埋め込まれていること」(Weeks「一九八六―一九九六 二二一」)を認識し損なっているのである。

運動が求めた規制によって、女性の身体の豊富なグラフィックと情報が含まれたフェミニストの著書が図書館や学校において禁止されたり、運動が道徳右派と結びつくことによって多様な性のあり方、とりわけ同性愛の表現規制に帰結したことが批判されている⁵。

日本では、フェミニズム運動として「ポルノグラフィ」の公的規制を求めることには一般的に批判的見解をとるものが多い。「誰が」それを見て、ポルノグラフィであると判断するのかは、社会における秩序についての決定権の所在を示す。そして、そこに女性の関与する余地は、いまのところ、あまりない(紙谷 一九九五 五二)からである。とはいえ、フェミニズムが提示してきた「女性差別としてのポルノグラフィ」というスローガンが、母親として家庭を清浄に保つことを目的とする「有害」コミック運動などに利用され、子どものセクシュアリティ管理をするためのスローガンに矮小化されてしまうという場面も見られてきた(守 一九九八 b 四六)。「ポルノグラフィ」批判理論が運動に適用される時にみられるこれらの陥穽は、既成の政治的二項対立「批判か擁護か」と同じ図式に回収されてしまいがちであるゆえに起こるものだろう。どんなにその思想的背景が異なっていようとも、「ポルノグラフィ」批判は、これまでの「ポルノグラフィに反対する道徳主義」陣営に利用されたり、この陣営

求められるのは、セクシュアリティの多様性を認めつつも、実際の社会には選択の価値や選択を制限する条件があることを問題化するような立場である。つまり、「猥褻」対「性解放」対「表現の自由」という対立を乗り越え、表現の積極的な(affirmative)男女平等を求めて、これまで閉ざされていた反「ポルノグラフィ」という言論の回路を獲得しようとするのが「ポルノグラフィ」反対運動である。⁴「ポルノグラフィ」反対運動とは、「ポルノグラフィ」は嫌だ」「性的虐待反対」という言論が、「ポルノグラフィ」によって奪われていることに對する批判の運動なのである。

三、「ポルノグラフィ」批判理論の難点―経験の多義性から の考察

言説の効果がはらむ難点

しかし、このような理念に裏打ちされているにも関わらず、「ポルノグラフィ」批判はポルノグラフィに対する多義的な経験を否定するような効果を生み出しがちである。(それは理論の直接の帰結ではなく、あくまでも効果ではあるが。)

特に「ポルノグラフィ」反対運動の先進国である英米では、運動が要求した「ポルノグラフィ」の公的規制が、結果的に女性の利益に貢献しなかったことが報告されている。例えば、

として見なされたりしてしまう可能性を含んでいるのである。

また、「ポルノグラフィ」を内容によって定義し、具体化することによって、逆説的にあるべき女性のセクシュアリティを特定のものに画定し、それをすべての女性に押し付けるという効果をもってしまうこともある。典型的にはエロチカという概念を考えてみよう。性差別的な性表現をポルノグラフィという言葉で定義するのに對して、性平等的な性表現をエロチカと定義し、このエロチカを創造していくことを求めるといふ戦略が主張されることがある。エロチカとは、典型的にはスタインムが論じるように、「快感、触れ合い、暖かさ、感情移入、官能の喜び、とても自然で真実な感覚、愛、尊敬、パートナーシップ、快楽、共感など」(Steinem「一九八三―一九八五」)をその特徴とするものとイメージされている。このような形で認められうる性表現を確定してしまうことは、相互友愛的セクシュアリティを押し付け、政治的に「正しい」セクシュアリティよりもブッチーフエム役割やSMなどを好む女性を排除しがちである。「ポルノグラフィ」批判理論は、「ポルノグラフィ」の内容を定義してしまうことによって、セクシュアリティの多様性を否定してしまう効果をもちやすいのである。

これらの陥穽は、「ポルノグラフィ」に対する反対」という表現を「女性の言論」として位置付けてしまった結果、女

性の多義的な経験、とくに女性の性欲の多様性を置き忘れがちなどころから生じている。確かに、〈ポルノグラフィ〉批判理論は、女性の視点を欠落させた「社会秩序論」や「表現の自由論」を批判するために、「〈ポルノグラフィ〉」に対する反対」を「女性の表現」として位置付けてきた。しかし、このような理論化は、男性社会によって虐げられてきた女性こそが、無力だからこそ差別的ではない真実の言論を創造できるという前提によりかかりすぎてはいないだろうか。もちろん、「女性の表現」を可能性の中心としていく立場は、貶められてきた女性の価値を積極的に評価しようとするものである。だが、抑圧的なセクシュアリティのもちぬしである男性よりも、抑圧されてきた女性のほうが優れたセクシュアリティをもち、セクシュアリティの真理を分かるという前提に根ざしてはいないか。とくに「〈ポルノグラフィ〉」に対する反対」表現を「女性の言論」と位置付けるような議論は、「男／女」の差異を絶対化・本質化し（男性だからといって〈ポルノグラフィ〉）批判に賛同しないわけではない）、現実の女性の認識を否定するという過ちをおかしがちである。例えば、マッキノンが、来日した時の講演会で、ポルノグラフィがレディースコミックという形をとって女性の中にも普及しているという日本での状況は、「マスコミが男性向けにポルノグラフィをより刺激的にするために流した偽の情報である」と

のだ。⁶この読解は検証されているとはいえないが、少なくとも〈ポルノグラフィ〉が表現しているものは、現実と一対一で対応するものではなく、現実の世界とは異なるものを意味することもありうるだろう。現実と〈ポルノグラフィ〉における表現を分けて考えることは重要である。

また、〈ポルノグラフィ〉批判理論は受け手の解釈の可能性を狭く捉えすぎているのではないかという疑問も出されている。山崎カヲルは、女性のオナニーションを見る男性は、そこに不在な男性の代わりに自分を想定することができただけでなく、女性の快楽を疑似体験している可能性があること、レイプシーンを見るとともに、犯す・犯されるとどちらか一方の立場に自己同一化するとは限らず、犯し犯されるという二重の快楽を体験している可能性があることを指摘する。つまり、ポルノグラフィは、セクシュアリティの可変性や代替可能性の幅を広げていくことによって、性における硬直した男／女の役割を壊す力を強める働きをする可能性があることを主張しているのである（山崎 一九九四 七九）。狭義のポルノグラフィを含めても、〈ポルノグラフィ〉の受け手の解釈についての研究は、まだあまりない。基本的に、狭義のポルノグラフィを読む時、受け手は自己と同じ性別の人物に自己同一化すると言われている⁷。しかし、男性向け（狭義の）ポルノグラフィに女性同士の性愛が描かれたり、女性向け

断定し、ポルノグラフィを見て楽しむ女性は非常に例外的で、チャイルド・アビューズを受けたことがある人だと述べたことが紹介されている（村瀬 一九九六 一〇二）。このような否認は、女性の性欲の多様性を「女性の言論」から切り落としてしまうような思考から導かれてしまった陥穽だろう。〈ポルノグラフィ〉批判においても、女性の性欲の多様性を視野に入れた理論が組み立てられる必要があるのだ。

「ポルノグラフィ」文化」と狭義のポルノグラフィの分離

〈ポルノグラフィ〉批判理論のもう一つの大きな問題点は、意味の循環流通する過程に対する分析的視点をしばしば欠落させてしまうことである。〈ポルノグラフィ〉批判理論は、〈ポルノグラフィ〉と現実を直結させて捉えてしまうことによつて、受け手による多様な解釈を見逃しているのだ。

〈ポルノグラフィ〉批判理論が表象を現実の直接の反映と見なしていることに對して、精神分析的視点から〈ポルノグラフィ〉を論じる論者が疑問を提示している。現代の現実の世界では男性が女性に対する支配力を喪失しており、男性権力を補償するために、〈ポルノグラフィ〉においては男性による女性に対する支配が描かれているのだという読みを彼らは提示する。男性による女性の支配を描く〈ポルノグラフィ〉とは、セックスに対する男性の不安を示しているという

（狭義の）ポルノグラフィでは男性同士の性愛が描かれること、あるいは、とくにマンガなどで男性器も女性器ももつような身体が描かれることを考えるならば、山崎の提示するような解釈が働いている可能性もある。詳しい分析が必要ではあるが、（狭義の）ポルノグラフィには固定化されたジェンダーを壊乱するような力があるかもしれないのである。

少なくとも、どのようにせよ彼らの分析に答えるためには、〈ポルノグラフィ〉が表す表現自体を現実そのものとみなすのではなく、循環・流通・消費される過程の中で、個々の〈ポルノグラフィ〉がもつ意味を捉えなければならない。とりわけ、実際に消費者が意味をどう解釈・解説しているかを研究する必要があるだろう。

このような意味解釈の重視という点において、現在の〈ポルノグラフィ〉批判理論には問題がある。それは、〈ポルノグラフィ〉批判を「〈ポルノグラフィ〉文化」批判に拡張してしまったことである。〈ポルノグラフィ〉を考察するとき、メディアが置かれた社会的コンテクストと受け手のリアリティの差異に着目するならば、①「読者の性的欲望を起す商品」として社会的に定義されている狭義のポルノグラフィと、②メディアに女性の性的身体が氾濫していることを指す「ポルノグラフィ」文化」とを区別する必要があるだろう。後者の「ポルノグラフィ」文化」とは、（男性向け・狭義の）

ボルノグラフィと同じ「見る男性主体―見られる女性身体」という視線の構造をもつ性的表現が、「性的欲望を喚起する」という文脈以外でも様々な形で生活世界の中に入り込んでいる社会的状況をさしている（二章）。それぞれが社会的に異なったコンテクストに置かれていることを考慮に入れるならば、「ボルノグラフィ」文化」から狭義のボルノグラフィを切り離したうえで、それぞれ固有の問題は何かを考えていく必要があるのだ。

四、狭義のボルノグラフィ

女性向けボルノグラフィからの逆照射

では、狭義のボルノグラフィ——「（ボルノグラフィ）文化」とは分離した意味で——がもつ問題とは何かを考察してみよう。もう一度確認するならば、ここで論じるボルノグラフィとは、送り手も作り手も含めた社会一般が「読者の性欲をおこそうとする商品」とみなしている性表現に限る。とくにここでは独りで行うマスターベーションに利用されるものとしてのボルノグラフィに限って論じてみよう。

ボルノグラフィを考えるに当たって、もう一度冒頭の個人的な出発点に戻ることをお許し願おう。思考の素材として、女性向けボルノグラフィ⁸を扱うことによって、男性向けボル

ノグラフィから受ける嫌な気持ちとは何かを考えてみたいのである。また、女性向けボルノグラフィをも含めて考慮することによって、ボルノグラフィ全体がもつ根本的な問題点とは何かを考えることができるだろう。

日本では一九九〇年代に入って女性向けボルノグラフィというジャンルが成立しており、現在そのジャンルは一応の定着を見せている。この女性向けボルノグラフィの特徴は次の二点に集約できる。一つは、女性の側からの意味付けが徹底的に描かれていることである。そしてもう一つは、ボルノグラフィに描かれるセクシユアル・ファンタジーを、現実世界に属するものではなくあくまでも幻想世界にとどめようとすることである。

女性向けボルノグラフィは女性読者からの投稿やお便りの比重を高め、そして物語作品においては主人公となっている女性のモノローグを必ず描き込むことによって、そこで描写されている性的行為への女性の側からの意味付けを提示しようとする。写真でさえ、演者がなぜそのような写真のモデルとなろうと思ったのかという理由付けや舞台裏、撮影後の感想を記載している。女性向けボルノグラフィで写真を載せる時には、しばしば読者の中から募られたモデルによるという体裁をとるが、彼女たちがモデルになろうと思った理由付けが、自分の性的パートナーには言えない憧れのシチュエーシ

ョンを演じてみたいというものから、憧れのアダルトビデオ男優と性的行為をしてみたいというもの、あるいは心身のカウンセリングとしてというものまでさまざま記述される。このように、女性が読むことを意図して作られたボルノグラフィは、女性の側からの意味付けを必要不可欠なものとしているのである。

また、女性向けボルノグラフィは、特にレイプファンタジーを描写するとき、そこで描かれている表現が現実世界に属するものではないことを示そうとする。例えば、女性向けボルノグラフィでレイプファンタジーを載せる場合、「絶対に現実には起こってはいけないこと」、「『そうか、レイプでも気持ちいいんだ』なんて勘違いする男がいないことを祈るよ」（『Lady's Magazine fun』マガジンボックス一九九五年九月号）といったコメントが必ず補足される。また、日本では女性向けボルノグラフィがマンガという形で発展しているが、マンガは現実のレベル、生身の人間を使用しなくともビジュアル的な表現を追求することができるメディアであるからの部分が大きい。このような但し書きやマンガというメディアでの発達という事態から、ボルノグラフィで表現されていることと「現実」が違う水準のものであることを示すことが女性向けボルノグラフィにとって重要であることは明らかである。

これらから、男性向けボルノグラフィに欠落していることとして、女性の側からの意味付けがないことと、特にレイプのような描写があるときに、そこで「演じられているもの」が本当のレイプではないかという不安を引き起こすことを指摘することができるだろう。その意味において、女性向けボルノグラフィから照射される男性向けボルノグラフィの偏りとは、ボルノグラフィ批判理論と重なっていると言える。ボルノグラフィを消費する「女性の実感」から照らしあわせても、男性向けボルノグラフィは女性からの意味付けが欠落しており、その表現に現実のレイプを含んでいるという問題があるのだ。

つまり、私が男性向けボルノグラフィから受けていた嫌な気持ちとは、その一つは言うまでもなく、現実のレイプが見え隠れするようなものに対する恐れだろう。そして、もう一つは、女性の側からの性行為への意味付けがないままに、女性はこのいうものだという一方的な決め付けに対する違和感だったのだろう。男性向けボルノグラフィの「女性はこうすれば感じるのだ」という一枚岩的な語り口と、女性向けボルノグラフィにおける「わたしはこうすれば感じるのだ」というさまざまな女性による複数形の語りでは、一人の女性の読み手にとって、どちらに違和感が少ないかは明白である。しかし、女性向けボルノグラフィもまた、女性にとって都合の

いいような男性像を使用しているという点では同じかもしれない。⁹

狭義のボルノグラフィの問題点とは何か

〈ボルノグラフィ〉批判理論の再考に返ろう。二章で確認したように、〈ボルノグラフィ〉は、①女性への暴力、②女性の服従、③女性の部分化を描くことによって、セクシュアリティの楽しみを社会的に定義し、性差別を支えていることが問題化されてきた。女性向けボルノグラフィを含め、ボルノグラフィとはこのような問題点と切り離せないものなのだろうか？

ここで考えてみたいことは、本当にボルノグラフィが「セクシュアリティの楽しみを社会的に定義する」のだろうか、という問いである。確かに女性向けボルノグラフィにおいてさえ、ストーリー的にはこれまでの男性向けボルノグラフィと同様、暴力や女性の服従などを描いたものも見られる。しかし、このような内容をボルノグラフィが描くからといって、現実がこのようなものに作られてしまうとするには疑問が残る。ボルノグラフィを消費する経験をもう一度考えてみよう。ボルノグラフィの受け手は、既にマスターベーションに利用するイメージの好みを持っており、そのようなネタを探すという形でボルノグラフィを消費することが多いの

ではないか。そしてこのようなマスターベーション・ファンタジーの好みはたやすく変えることができないように観念されていることが多いのではないだろうか。そして、マスターベーション・ファンタジーと現実的な性行為が同じ範疇にあるものとは限らず、それが別立てであるということも大いにありうることだろう。これらは、本来ならば、実証的に調査・分析しなければならぬ問いではある。これらは単にわたしの事例に過ぎないかもしれないが、少なくとも非現実的なシチュエーションのマスターベーション・ファンタジーを人がもちうることを考えても、マスターベーションの楽しみと、相手がいる状況での現実的な性行為とは分けられうるものではないだろうか。

例えば、女性向けボルノグラフィがファンタジーをファンタジーとして留めようとしていることを振り返ってみよう。女性向けボルノグラフィがレイプ・ファンタジーを描いたとしてもレイプされたいと内面化する女性はいないのである。ただし、急いで付け加えなければならぬことは、女性向けボルノグラフィの受け手さえ、現実のレイプとレイプファンタジーとが未分化であることの問題である。女性向けボルノグラフィに書かれた次のような読者コメントを考えてみたい。

「自分でレイプされたいって気持ちと、レイプされたっ

ていう気持ちは、同じレイプでも違いますよね。レイプされるということは女性にとって怖いことですが、女性なら誰でも、心の隅にほんの少しでもあるんじゃないでしょうか？私もその一人です。（中略）主人とSEXするとき、もっと荒々しくとか、言葉で「犯してやるー」とか言われてみたい。レイプごっこっていうか、部屋の

中を逃げ回って追い詰められて服も脱ぎ取られて「きゃーっ!!」と叫びながら犯されてみたい。（広島県・二十七歳・主婦）「『危険な愛体験』ビデオ出版一九九七年十一月号」

投稿の書き手である読者にとって望んでいるシチュエーシ

ョンとは、本当のレイプではなく、あくまでファンタジーとしての「レイプ」である。しかし、このような発言が「女性のレイプ願望」として読みこまれてしまう危険性は高い。狭義のボルノグラフィにとって重要なことは、現実ではなく幻想という前提の下で議論を進めることができることではないだろうか。まずは、その場で働く人々の労働条件が改善される必要がある。それが貫徹されて始めて、ボルノグラフィが現場で働く女性への差別を隠蔽しているのではないか、ボルノグラフィの撮影現場でレイプが行われているのではないか、といった恐怖にとらわれなくとも済むようになる。そし

て、本当のレイプとレイプファンタジーが違うものであるということが明確に理解されるための「ことば」を確立していくことである。

レイプへの恐怖をかきたてるものは、女性にとって（快楽を引き出すものという意味での）ボルノグラフィではないのだ。伏見憲明が「性^{エロス}をベッドに封印する（伏見 一九九一 一七五）」というスローガンで語ったように、ボルノグラフィに描かれる内容を幻想世界のものとして閉じ込め、現実と区分し、性的妄想は性的妄想として貫徹させることを主張するという立場もありうるのではないだろうか。

五、ボルノグラフィが問題なのか？

結局、ボルノグラフィが問題なのだろうか？ 狭義のボルノグラフィから浮かび上がってくる問題とは、ボルノグラフィに強固につきまといがちな、現場で働く女性への差別が隠蔽されること、そして〈ボルノグラフィックな〉イメージが現実化してしまうことだった。ならば、狭義のボルノグラフィに対する〈ボルノグラフィ〉批判とは、性産業で働く女性の労働環境の改善要求¹⁰と、〈ボルノグラフィ〉が現実と混同されることの批判となる可能性もあるだろう。

また、〈ボルノグラフィックな〉イメージの蔓延による女

性の矮小化を批判するという意味での「ポルノグラフィ」批判は、狭義のポルノグラフィよりも「ポルノグラフィ」文化」が重要な対象となるべきかもしれない。性的な文脈ではないのに、女性の性的イメージが多用されることのほうが問題なのではないか。この意味で現代において問題なのは、ポルノグラフィではなく「ポルノグラフィ」文化」なのかもしれない。

ただし、自己身体を見られるものとして統御すること、それ自体を否定することはできないだろう。私たちは「男でもなく、女でもなく」の著者葛森樹の、さまざまな意味を付与された「男として」でもなく、「女として」でもなく、ただ欲望される身体を享受したいという、自らの身体をかけた悩みを思い起こすことができる。性的コミュニケーションを成立させる時、人としての私たちは、もしかすると相手の性的関心を引く（あるいは性的欲望を喚起させる）必要があるかもしれない。私たちは、女性が男性の性的関心をひくことばかりではなく、男性が女性の性的関心をひくこと、さらには女性が女性の性的関心をひくこと、男性が男性の性的関心をひくこと、そこまでは少なくとも視野に入れなければならない。そのようなさまざまな多様性を視野にいた上で、「ポルノグラフィ」文化」が「女性が男性の性的関心をひくこと」を中心化していること、この問

題性を考え抜くことこそが必要とされるだろう。

さらに、ポルノグラフィもまた「ポルノグラフィ」文化」の影響から決して自由ではないことも忘れてはならない。職場に女性のヌードポスターをはるといったように、その場に女性をポルノグラフィに描かれているものに矮小化しようとする意図の表明としてポルノグラフィが使われることもある。

必要なのは、ポルノグラフィを批判のためのことばに仕立て上げ、すべてを棄却してしまうのではなく、今、この時代に問題にすべきことは何かを考えていくことではないだろうか。

註

1 なお、本節で「ポルノグラフィ」批判理論としてとりあげているのは、Mackinnon [1987=1993] [1994=1995], Dworkin [1979=1991], Barry [1979=1984] の議論である。ただし、彼女たちの議論は、ポルノグラフィを中心としたセクシュアリティが生み出す性差別に重きを置きすぎているという問題を孕んでいる。言うまでもなく、性差別は必ずしもセクシュアリティとポルノグラフィのみによって生み出されるものではないだろう。

2 「ポルノグラフィ」批判理論を狭義のポルノグラフィからメディア文化一般に拡張したものとして Rich [1986=1989:73]

など。また、「ポルノ文化」という言葉はホーン川嶋（一九九六）による。

3 フェミニズム視点が導入される以前の「ポルノグラフィ」は、すべて（狭義の）ポルノグラフィを示している。

4 Mackinnon [1987=1993:chap.13] を参照。

5 Leong [1991], Assiter & Carol [1993:9] など。

6 Segal [1987=1989:165], Giddens [1992=1995:chap.7] など。

7 赤川（一九九六）など。

8 女性向けポルノグラフィについては守（一九九八a）を参照。女性向けポルノグラフィの中でも一番発行部数の多い月刊雑誌、[Iconic Amour] を発行しているサン出版編集部に訪ねていたところ、毎号数百通の読者からの手紙が届いており、そのすべてが女性からのものだった。また、編集部にも女性スタッフが多数いるし、とくにポルノマンガ作品を書いている作家は女性が多かった。

9 それにしても男性向けポルノグラフィも女性向けポルノグラフィも、「女性の快楽」の探求という点で、全く同じ構造であると言える。「男性の快楽」の探求はどこにいつてしまったのだろうか？

10 例えば、Rubin は、「フェミニズムはポルノと闘うのではなく、検閲に反対し、売春の脱犯罪化を支持し、一切の猥褻法案の廃棄を呼びかけ、性産業者の諸権利を擁護し、性産業において管理職にしている女たちを支持し、性的に明示的な素材の入手可能性を進め、若者への性教育を促進し、性的少数派の権

利を支え、人間の性的な多様性の適法性を主張すべきである」と論じている (Rubin [1993])。

引用文献

赤川学「性への自由／性からの自由 ポルノグラフィの歴史社会学」青丘社 一九九六

Assiter A. & Carol A. *Bad Girls & Dirty Pictures*, Pluto Press, 1993

Barry, Kathleen *Female Sexual Slavery*, Prentice-Hall, 1979
＝「性の植民地 女の性は奪われている」時事通信社、田中和子訳 一九八四

Dworkin, Andrea *Pornography: Men Possessing Women*, E. P. Dutton, 1979＝「ポルノグラフィ 女を所有する男たち」青丘社、寺沢みずほ訳 一九九一

Giddens, Anthony *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press, 1992

＝「親密性の変容 近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム」而立書房、松尾精文・松川昭子訳 一九九五
ホーン川島瑠子「日本の大衆文化のジェンダー・イデオロギー：女のアイデンティティとセクシュアリティの構築」『日米女性ジャーナル』二〇号 一九九六

船橋邦子「ポルノグラフィの政治学」『フェミニズム入門』別冊宝島85、JICC出版局 一九八八

伏見恵明『ブライベート・ゲイ・ライフ』学陽書房 一九九一
紙谷雅子「性の商品化」と表現の自由」『フェミニズムの主張二

性の商品化」江原由美子編 一九九五

Leong, Wai-Teng The Pornography "problem": disciplining women and young girls in media, *Culture and Society*, Vol. 13. 1991

Mackinnon, Catharine *Feminism Unmodified: Discourse on Life and Law*, Harvard Univ Press. 1987 = 「フェミニズムと表現の自由」明石書店、奥田曉子・加藤春恵子訳 一九九三
—— *Only Words*, Harper Collins. 1994 = 「ボルノグラフィ―「平等権」と「表現の自由」の間で」明石書店、柿木和代訳 一九九五

守 如子「女性向けボルノグラフィ ―レディースコミック―から浮かび上がるセクシュアリティ」『Sociology Today』第九号、お茶の水社会学研究会 一九九八^a

——「〈性風俗批判〉における「母」というレトリック」『相関社会科学』第八号、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻 一九九八^b

村瀬ひろみ「日本のボルノ状況と『性教育』―マッキノンに就いて」『女性学年報』第一七号、一九九六

中山千夏「からだノート」タイヤモンド社 一九七七

Rich, Adrienne *On Lies, Secrets, and Silence*, W. W. Norton & Company. 1980 = 「血'ハ'ン'詩」晶文社、大島かおり訳 一九八九

Rubin, Gayle *Misguided, Dangerous and Wrong: an Analysis of Anti-Pornography Politics*, Assiter & Carol(ed.), 1993

Segal, Lynne *IS THE FUTURE FEMALE?: Troubled Thoughts*

on Contemporary Feminism, Virago Press. 1993 = 「未来は女のものか」勁草書房、織田元子訳 一九八九

Steinem, Gloria *Outrageous Acts and Everyday Rebellions*, Holt, Rinehart & Winston. 1983 = 「ブレイボーイ・クラブ潜入記―新生き方論」三笠書房、道下匡子訳 一九八五

葛森樹「男でもなく女でもなく」勁草書房 一九九三
Weeks, Jeffrey *Sexuality*, Routledge. 1986 = 「セクシュアリティ」河出書房新社、上野千鶴子監訳 一九九六

山崎カヲル「ボルノをめぐる諸問題―反ボルノ派フェミニズム批判」『インパクション八四』インパクト出版会 一九九四